

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 10 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730651

研究課題名(和文) 多文化社会ドイツにおける排除と共生の葛藤に学ぶ教育に関する研究

研究課題名(英文) Education in Conflicts between Exclusion and Living together in Multicultural German Society

研究代表者

伊藤 亜希子 (ITO, Akiko)

福岡大学・人文学部・講師

研究者番号：70570266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、多文化社会ドイツにおいて、文化的背景の異なる他者の排除と共生の葛藤に学ぶ教育活動の事例として、アンネ・フランク・センターと「レイシズムのない学校」プロジェクトに着目し、その内実を明らかにするものである。文献研究及び現地調査の成果として、異文化間教育論やレイシズム研究からこれらの教育活動を理論的に位置づけるマトリックスの試案、「レイシズムのない学校」プロジェクトによる青少年の現実と乖離しない活動を支えるコーディネーターの特質とリソース、アンネ・フランク・センターによる「過去」と「現在」をつなぐアプローチの有効性、青少年のさらなる社会への働きかけを支える素地について提示した。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed to make clear contents of the education in conflicts between exclusion and living together in multicultural German society, by focusing on educational programs by “Anne Frank Zentrum, Berlin (AFZ)” and “Schule ohne Rassismus-Schule mit Courage (SoR-SmC)” as examples. As results of this research project, I showed the 4 following points. Firstly, I suggested a matrix for theoretical meanings of these educational programs from the viewpoint of intercultural education and racism studies in Germany. Secondly, I showed features of coordinators and resources for SoR-SmC in order to make programs connected with teenagers’ daily life. Thirdly, I showed that AFZ took an effective approach for making connection with past and today. Fourthly, I pointed that both AFZ and SoR-SmC had seeds for supporting teenagers who tried to lobby the society to deal with discrimination, prejudice and racism.

研究分野：異文化間教育

キーワード：異文化間教育 ドイツ 青少年教育 差別 多文化社会

### 1. 研究開始当初の背景

多文化社会においては、理念的には多文化共生が目指されるが、現実には他者に対する排除が存在し、多文化共生は容易ではない。周知の通り、既に多文化社会となっている欧州諸国においてさえ、排他主義や極右傾向が顕著になり、移民排斥や「統合の失敗」といった声が聞かれる。

そのような状況下であっても、他者との共生への努力を続けていく必要が今日の青少年には求められる。共生とは、他者の持つ異文化性を理解し、受け入れることで可能となると考えられるが、そのプロセスにおいては、他者の持つ異文化性を受け入れようと対処する際に例えば自身の価値観との相違に戸惑い、葛藤が生じる。その結果、葛藤し続けながらもなお他者を受け入れようと努力することを選択する場合もあれば、異文化性を排除するという選択も生じる。あるいは、こうした葛藤を経験する以前に、ステレオタイプから判断し、異文化性を受け入れるという選択肢を思い描くことなく排除に進むこともあるだろう。こうしたさまざまな可能性を展望し、その困難さを理解した上でなお共生を目指すことが、これからの多文化社会における市民としての青少年に求められているのである。

ドイツにおいては、こうした点を踏まえた青少年教育が多様に展開されており、排除と共生の葛藤に向き合う教育活動や実践が蓄積されている。

しかしながら、こうした排除と共生の葛藤に向き合う教育活動としての青少年教育に注目した研究は僅少である。日本においては、生田周二(1998)『統合ドイツの異文化間ユースワーク』(大空社)、ドイツにおいては Leiprecht(2003):Alltagsrassismus.(Waxmann)が理論と実践の関連づけや実践や現象の類型化を行っているが、本研究で注目するような排除と共生の葛藤に学ぶ教育活動の内実やそこに込められる共生の方途についての言及は見られない。

また、この排除と共生の葛藤に学ぶ教育活動を検討するにあたって、異文化間教育論の第一人者である Nieke(1995): Interkulturelle Erziehung und Bildung.(Opladen)が示す「出会いの教育」と「葛藤の教育」という異文化間教育の2つの方向付けは教育活動の分析に有効な視点である。しかし、これらは提示されたにとどまり、実際の教育活動の分析軸としては用いられていない。

### 2. 研究の目的

本研究は、排除と共生の葛藤を体験的に学び、日常生活に現れる差別や偏見、レイシズムに取り組むドイツの青少年教育に注目し、共生に向けた課題に如何に取り組み、共生の方途を模索しているのか、その内実を明らかにすることを目的とする。青少年の日常生活

に関連づけられた教育活動の内実を明らかにすることで、多文化化の進捗する日本における異文化間教育実践としての青少年教育活動の再構築に寄与しうる。

この研究目的の下、本研究では次の2つの研究対象による教育活動に焦点化する。

第一に、アンネ・フランク・センター(Anne Frank Zentrum, Berlin)による教育活動である。アンネ・フランク・センターは、その名からも想像できる通り、ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害の被害者であるアンネ・フランクとその家族の物語を通して、第二次世界大戦時のユダヤ人に対する差別やホロコースト、そして現代社会においてもなお存在する差別や偏見、人権侵害についての教育活動を展開する国際組織の一つである。関連組織の中でもとりわけ活発に教育活動を展開し、教材やワークショップの開発、普及を行っている。その教育活動に通底するのは、ドイツ社会の「過去」と「現在」を関連づけ、社会における文化的多様性に対する相互理解や共感性に基づいている点である。

第二に、「レイシズムのない学校 - 勇気のある学校 (Schule ohne Rassismus-Schule mit Courage, SoR-SmC)」プロジェクト(略称「レイシズムのない学校」プロジェクト)による教育活動である。このプロジェクトは、ベルギーで始められた活動であり、ドイツにおいては1995年に社団法人「行動の勇気 (Aktion Courage e.V.)」がそのアイデアを取り入れ、活動を開始した。民族や宗教、ジェンダー、性的指向等に対し、さまざまな形で現れる現在のレイシズムに対し、学校をフィールドに青少年が主体的に取り組むことを主眼に置いている。そのため、プロジェクトの連邦コーディネイト事務所では、青少年が活動のアイデアを得られるよう、テーマに関するハンドブックやテーマ・ノートを作成・配布したり、連邦レベルや州レベルでワークショップを実施している。

これらの教育活動は、青少年の生活世界に密接に関わる排除と共生の葛藤の中での差別や偏見、レイシズムに関する学びを重視している。本研究では、これらの活動の内実を明らかにし、そこで模索される共生の方途を検討する。

### 3. 研究の方法

本研究の実施には、ドイツ社会における文化的背景の異なる他者の排除と共生の葛藤に学ぶ教育活動を具体的に明らかにするために、その中心となる異文化間教育や反人種主義教育の理論と実践、さらに青少年教育活動に焦点化した文献研究を行う。それを踏まえ、調査対象が展開する、青少年の生活世界に根ざした排除と共生の葛藤に学ぶ教育活動の実施状況に関する調査や参加者へのインタビュー調査を行う。具体的には下記の通りである。

#### (1) 文献研究

異文化間教育論、反人種主義教育論に関する文献を収集し、理論的背景と動向について把握する。それに基づき、研究対象による排除と共生の葛藤に学ぶ教育活動の位置づけを明確にするため、分析枠組みの検討を行う。

アンネ・フランク・センター及び「レイシズムのない学校」プロジェクトによる教育活動に関する資料収集・分析を行う。それにより、活動の概要や特質を把握し、現地で実施するインタビュー調査の内容を検討する。

#### (2) 現地調査

2012年度は、アンネ・フランク・センター（ベルリン）「レイシズムのない学校」プロジェクト連邦コーディネーター（ベルリン）、NRW州担当者（ケルン）を訪問し、各教育プログラムの実施状況や教材開発についてのインタビュー調査を実施する。特に、アンネ・フランク・センターでは、2012年に完成した新しい巡回展パネルに伴う教育活動について具体的情報を得る。

2013年度は、アンネ・フランク・センターの新たな巡回展パネルの展示に伴って行われるガイド・トレーニングへの参与観察を行う。それにより、巡回展パネルとガイド・トレーニングを通して、異なりを持つ他者の排除と共生の葛藤について青少年に如何に学ばせようとしているのか、そして青少年の反応はどのようなものであるのかを明らかにする。「レイシズムのない学校」プロジェクトについては、地域レベルにおける取り組みに着目し、「レイシズムのない学校」から「レイシズムのない街」へと活動を展開した青少年とかれらを支えた社会教育士にインタビュー調査を実施する。また、「レイシズムのない学校」プロジェクトの活動に協力する関連組織を訪問し、資料収集を行う。

2014年度は、2012年度と2013年度で実施した現地調査を踏まえ、アンネ・フランク・センターと「レイシズムのない学校」プロジェクト連邦コーディネーターを訪問し、補足資料の収集と現在進行中の教育活動について資料収集及びインタビュー調査を実施する。

これら文献研究及び現地調査を踏まえて、研究成果をまとめる。

#### 4. 研究成果

本研究の成果は、以下の点に集約される。

第一に、ドイツにおける異文化間教育論とレイシズム研究において提示されている異文化間教育と反人種主義教育を構想する際の目標を整理し、それを基に教育実践を位置づけるためのマトリックスを試案した点である。

これは、異文化間教育論の第一人者であるNiekeが示した異文化間教育の「出会いへの方向付け」「葛藤への方向付け」という2つの方向性と目標の認知的側面、情緒的側面、

行動的側面という3つの側面に注目したマトリックスに基づくものである。これに、個人に対する教育目標から社会に対する働きかけを目指すものとして「制度的・構造的目標」と、「出会いと葛藤の結果として方向付け」られるものを想定した方向付けを付加し、マトリックスの試案を提示した。そして、このマトリックスに、レイシズム研究の立場からLeiprechtが指摘する異文化間教育と反人種主義教育の構想における目標をマッピングした。これにより、本研究対象の教育実践の特徴を俯瞰的に捉える視座が得られた。

第二に、「レイシズムのない学校」プロジェクトの内実を明らかにすることにより、このプロジェクトが如何にして青少年の現実と乖離しない取り組みとして成立しているかを指摘した。このプロジェクトは、多文化社会における教育現場や青少年の抱える課題に関する豊富な経験や知識を持つコーディネーターによって支えられている。こうしたコーディネーターは不可欠であり、かれらは実際に青少年が直面する課題を捉え、活動のサポートをしている。

また、学校が活用できる多様なリソースが作成されている点もこのプロジェクトを支える要因となっている。連邦コーディネーターが作成するハンドブックやテーマ・ノートの一部には、カリキュラムとの関連も示されている。また、テーマについての参考文献・視聴覚資料、関連団体等の一覧もあり、青少年が自分たちで活動の内容を決定していく際のリソースとなっている。

第三に、アンネ・フランク・センターによる巡回展やそれに伴うガイド・トレーニングの実際を参与観察と文献研究から明らかにしたことで、アンネ・フランク・センターが採用する「過去」と「現在」をつなぐというアプローチの有効性を指摘した。アンネ・フランクが生きた第二次世界大戦時における差別や偏見は、過去にとどまるものではなく、現在においても向き合わなくてはならない課題であることを、巡回展パネルやガイド・トレーニングは示している。

その際、鍵となるのは、アンネ・フランクという10代の少女に対する青少年の共感性である。この共感性は、アンネ・フランクに対してのみ働くのではなく、自分たちの日常の中にある「異なり」を理由とした差別や偏見に対して向けられる。そうして、青少年が差別や偏見、レイシズムや他者との共生の葛藤を「自分事」として捉え、社会に対する意識を高めている様子が窺える。

第四に、これら研究対象による教育活動に共通している点として、教育活動に参加した青少年の中から、ドイツ社会における差別や偏見、レイシズムの問題、他者との共生の課題にさらに取り組もうとする青少年が現れており、こうした青少年に対する活動がさらに開かれている点である。

アンネ・フランク・センターの場合、それ

は「アンネ・フランク・メッセンジャー・プロジェクト」に見られる。ガイド・トレーニングを受け、ピア・ガイドとして活躍した青少年が、さらに自分たちで差別や偏見について取り組む企画を立て、実現していく支援をしている。「レイシズムのない学校」プロジェクトの場合は、それを学校から「レイシズムのない街」へと展開しようとする活動がある。

このように、本研究で着目した教育活動は、青少年の日常である生活世界を重視したものである。ここに共生の方途を青少年に模索させようとする特徴を見いだすことができる。青少年の日常を重視した活動だからこそ、これらの活動に参加する青少年は、差別や偏見、レイシズムといった自身の生きる社会の抱える課題に向き合い、社会に働きかけようとするのである。他者と共に生きることは当然の事のようにもなっているにもかかわらず、「異なり」に対する排除とそれとの共生の葛藤を常に抱える社会において、青少年の日常性から出発し、かれらの社会に対する働きかけが社会変革を生み出すような異文化間教育の実践は、今後ますますその重要性を増すだろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- (1) 伊藤亜希子・吉谷武志「人権教育におけるアンネ・フランク巡回展の活用—日本における可能性と課題—」『国際教育評論』(東京学芸大学国際教育センター) 査読有、No.12、2015年、35-47頁
- (2) 伊藤亜希子「アンネ・フランク・センターによる人権を重視した異文化間教育活動—ドイツにおけるアンネ・フランク巡回展とガイド・トレーニング—」『国際教育評論』(東京学芸大学国際教育センター) 査読有、No.9、2012年、35-48頁

〔学会発表〕(計6件)

- (1) 吉谷武志・伊藤亜希子「人権教育におけるアンネ・フランク巡回展の活用—日本における可能性と課題—」日本国際理解教育学会第24回研究大会、2014年6月14日、奈良教育大学(奈良県)
- (2) 伊藤亜希子「排除と共生の葛藤に学ぶ教育実践—ドイツにおける異文化間教育論による理論的位置づけの試み—」異文化間教育学会第35回大会、2014年6月7日、同志社女子大学(京都府)
- (3) Takeshi YOSHITANI, Akiko ITO: Learning about Discrimination

through Anne Frank: Pilot Projects of Human Rights Education in Japanese High Schools. Annual Conference of International Association for Intercultural Education (IAIE), September 18, 2013, University of Zagreb, Zagreb (Croatia)

- (4) 伊藤亜希子・吉谷武志「『アンネ・フランク』を素材にした高校における人権教育—高大連携による取り組みから—」日本国際理解教育学会第23回研究大会、2013年7月6日、広島経済大学(広島県)
- (5) 伊藤亜希子「多文化社会ドイツにおける青少年の異文化理解を促す体制づくり」異文化間教育学会第24回大会、2013年6月8日、日本大学(東京都)
- (6) 伊藤亜希子・吉谷武志「国際NGO『Anne Frank House』による国際理解教育活動—日本における展開も視野に入れて—」日本国際理解教育学会第22回研究大会、2012年7月16日、埼玉大学(埼玉県)

〔図書〕(計1件)

- (1) 伊藤亜希子『多文化社会ドイツにおける排除と共生の葛藤に学ぶ教育に関する研究』(科研費補助金若手研究(B)研究成果報告書)、2015年、60頁

#### 6. 研究組織

- (1) 研究代表者  
伊藤 亜希子 (ITO, Akiko)  
福岡大学人文学部教育・臨床心理学科 講師  
研究者番号: 70570266